

---

# 狂乱する科学

エレキ羊

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

狂乱する科学

### 【Nコード】

N6048E

### 【作者名】

エレキ羊

### 【あらすじ】

旅を続けるウィルは、偶然出会う老紳士の家へと招かれた。彼と彼の妻は暖かくウィルを迎えるのだが・・・

(前書き)

不慣れな文章で、読みずらい上に残酷描写が一部ありで、すみませ  
ん。  
楽しんでいただければ、さいわいです。

深緑の木々の枝をすり抜けた日の光が、獣道と言うには少し開けていて、街道というにはあまりに寂れた道を暖かく射す風景が昼下がりの長閑な時の流れを表していた。およそこの風景、散策を楽しむものにとっては、心持も足取りも軽くする気持ちのいいものだったろう。

だが、ずっと旅を続けてきたウイルにとっては、食傷気味の風景であった。もちろん彼もこういった風景にも新鮮味を感じ、心を奪われることがないわけではないのだが、それは心にゆとりがあつてこそ産まれるのであつて、フラストレーションが心を占めてしまふ今は少しのことでは心が揺らげなかつた。

彼を悩ませていたのは、空腹を満たす為に自分の手で狩猟を行い、毎日、野性味溢れる食事をするより、調味料を用いて手間を加えられた料理を口にする方が合っているとしみじみ感じることや、漂泊する旅が日々その身を汚濁し続けて、その汚れを落とすこともままならないものであるのも困りものだった。これら文化的暮らしを渴望する気持ちも当然ながら、ウイルはそれにもまして他者との会話、情報の伝播と受容を強く求めていた。

だから、以前読んだファンタジーのように草木や動物たちと自分が話せば、旅における歓楽は尽きないことだろうなどと考えながら、喉を潤すために緩やかな音と涼やかなにおいのする方へと足を運ばせていた。

ウイルの辿り着いた先には、地面より湧き出る清水が作った小さな泉があり、そのまま泉の縁へと近寄ると、清水の澄んだ清涼さが感じられるようだった。渴いた喉のためにもすぐさま口をつけ、鼻の頭を浸しながらも舌で水をすくいあげてゆく。

喉を通り抜け胃へと落ちた瞬間、その冷たさは、流浪の身とこの自然との乖離を顕在にする非情さも秘めていると思えるほど冷たかつ

た。だが、すぐにウイルは自身の浅はかさや自然の寛容さに気づいた。水は段々と体を侵染していき、溶け合うことでウイルを自然に帰属するものへ、自然との一体化を促していったのだ。そうして自然と一体になって一時が経つと、自然枠からはぐれた者をウイルは背後に感じて、彼自身に立ち戻って警戒するように振り向いた。

するとそこには、紳士と言っているいい風体をした男が、こちらを伺っていた。シルバーブラウンの頭髪にブラウンアイ。中年に差し掛かるだろう年頃で、柔和な表情を携えていた。

「随分と永いこと此処には住んでいるが、キミを見たのは初めてだ。この森には、以前から居るのかい？」

視線を下方へとずらしながら、眼前にいた、白くて精悍な顔立ちをした犬にそう問いかけた。

「いいえ、旅の途中に偶然、此処で休ませてもらっていました。」

低音だがよく通る声で、ウイルは紳士に答えた。そして、柔和な表情を崩さずにいる紳士に対して、浮かび上がる疑問を問うてみた。

「驚かれないのですか？犬が喋りかけたのには」

紳士は、さもあらんと頷き、しばらくして謎解きを楽しむ探偵口調に答えた。

「先ずキミは、自然に帰する存在じゃないだろうか？キミを産み落としたのは、科学のはずだね。」

「その通りです。」

ウイルは素直に聞かれた事に答えたものの、直ぐに答えへと繋がらぬ問いかけに、表情を曇らせたようだった。

「私は、ここに来る以前はかの都市にいて、研究所勤めをしていますね。折にふれては、この星の科学全盛の時代に生まれた研究成果の諸々のデータについても閲覧し、それに熱狂したものさ、今の時代には実現の術をなくしてしまった過去だとしてもね。」

少し悲しげな口調で言い終えると、また淡々と語りだした。

「その時代に残存した技術には、場所さえあれば惑星や恒星を自由に創生し、物体を構成する素粒子というものを解き明かして無から

有の構成をする事なんて容易いことだった。まるで、一流のSF小説だろう？だが、そんな再現不可能になったもはや夢物語に私は惹かれてやまない。なのに、自分が理論を知らないからといって、犬が喋るといふ現実を信じないようにドグマティックじゃないということだよ。」

そう言うと、教授が生徒たちにする様に解ったかねと、いった表情でこちらの返事を促してきた。

「よくよく理解しました。あと、あなたがずいぶんとしやべるのが好きなことも。」

ウィルは思ったまま告げた。いままで、まったく動じずに話しを進めた彼もそう言われると、初めて、弱点を突かれたと照れるように軽く咳払いをして、呼吸を整えなおして釈明した。

「いや、申し訳ない。妻以外と会話するのは、久しぶりでね、少し熱が入ったようだ。許して欲しい。なにしろ、此処で暮らしまして、四百五十年程も二人だけだったからね。」

紳士の言にでてきた動物にとってはあまりに長大な四百五十年という時間に対して、ウィルは首を傾げざるを得なかったが、紳士はその反応を楽しげに眺めると自慢げに言葉を連ねた。

「私は生物学と生体工学を専攻していてね、不老不死への研究の途上としてメトセラ化、不老長寿化を実現したんだよ。その為に四百五十年間生きても、変わらずこの姿のままさ。まあ、不老だということなら若々しい姿で博識な方が、ずっと説得力があっただろうがね。」  
「そう自嘲気味に皮肉を言つて、ウィルの笑いを誘うのだった。そして、はたと思いついたようで、

「そうだ、こんな所で立つて話すよりもぜひ家に寄って行ってみてはどうかね？キミさえよければ、泊まっていてもいい。妻も私以外と話をするのは初めてだしね。彼女にもいい刺激をもたらすかもしれない。」

ウィルにとつては願ってもないことであって、むしろこちらが気後れしてしまうくらいの申し入れだった。

「ではお言葉に甘えさせてもらって、一晩泊めていただきます。それと、私の名を伝えてなかったですね。私の名は、ウィル。姓は無く、名だけでウィルです。」

「私はオーレ・オルンシュタイン。オーレルと呼んでくれればいい。」  
「ウィルが、わかったと首を頷くのをオーレルは確認すると、くると踵を返して家へと向かいはいじめた。その後姿は、まるで子供が誰にも秘密の隠れ家を初めて友達に紹介するような無邪気さが写るほどに浮かれているようだった。」

木々の間を縫った先に、深い緑に囲われた小さな舞台のような野原が広がる。そのやや左よりに、自然と調和するコテージというよりは、周りの自然を威圧するくらいの科学的、人工的建築物が煙を吐いていた。元研究員というオーレルが住むには、ふさわしいとも思えたが。

「エレナ、今帰ったよ。今日は家に、ゲストがいらっしゃった。」  
意気揚々としたオーレルが帰宅すると、返事と共にエプロンを掛けたままのまだ青年程の美しい少女が笑顔を以って出迎えた。結い上げた黒い髪は少女を少し大人らしく見せ、下がった目尻が少女の笑顔の愛らしさを際立たしていた。そして彼女がエプロンを取る間にオーレルはとなりに行儀よく座り込んでいたウィルを紹介した。

「はじめまして、名前は聞いたとおりエレナって言うわ、かわいいお客さん。充分なおもてなしはできないかもしれないけど、気楽に泊まっていって。夕食もすぐに準備できるから。それとも、やっぱり、夕食は特別なものに作り直したほうがいいかしら。」  
と、不安げにオーレルに問いかけるのを見ると、ウィルは、

「いえ、お気になさらないください。普段から何だっって好んで食べますから。そんなに気を使われると、恐縮してしまって、かえって食事が喉を通らなくなります。」

慌てて、オーレルが口を開くより前に、思わず体を乗り出してまで

意見を述べていた。その過度な必死ぶりには、二人とも気圧されたようだったが、すぐに、吹き出して笑っていた。ウイルとしては、充分に気を利かせていったつもりだったのだが、二人の反応を見ると過敏になりすぎていたことがわかって、罰が悪くなって俯いてしまっただった。

「わかったわ。それじゃあ、夕食はそのままお出しする。でも、何だって食べますなんて言われると、ずいぶんとおいしくない夕食を期待されてるみたい。」

とエレナは言うのと、むくれたように膨れっ面をする素振りを見せて。ウイルは余計に焦りながら、そんな意図は無いと俯いた顔も上げれずにかぶりを振った。それを見て優しく微笑んだエレナは、ウイルの頭から首筋にかけて、そのガラス細工のような透明感のある細い指を何度も行き来させて、毛を梳かすように撫でてやった。やわらかく暖かな春風のような気持ちよさに、ウイルは自ずと撫でる手に自分の体を擦り付けていた。そして、そこには安堵の気持ちが生まれていた。

「さあ、エレナもウイルもそれまでにして、会話の続きは食事を交えてということにしようじゃないか。」

オーレルの言葉でこの幕は終わりを告げる。

その夜は一流ホテルのような整然とした華美さはなかったが、普通の家庭料理よりも手間を加えられた彩りも鮮やかな料理が、テーブルを占め、その上が三人の楽しい会話の場となっていた。会話の七割方は、オーレルの研究や体験談が語られ、あとは二人に促されたウイルが旅の話をかきかせるのだった。それは、食事を終えても場所をリビングへと移して続いた。エレナの静止がなければ、朝までオーレル主導でこの会話は止まなかっただろう。そして、旅人ウイルのために、早々とみな床につくことにした。ウイルは、リビングにある羊毛と合成繊維から織られたブラウンレッドの厚い絨毯を寝床にし、二人は奥の寝室のベッドへと引っ込んでいった。ウイルは

久々に人との会話、心にふれる温かみを感じて、その余韻に浸るように静かに眠りへと就く。

夜半、鉄柱でも地に突き刺さすような衝撃と音が屋内を駆けた。狼狽したウィルが起き上がりんとする内に、さらに二度、三度と鋤物を鈍器で打ち付け、砕くような音が続いた。ウィルはすぐさま音の響いた方へ、オーレルとエレナの寝室へと足を向ける。扉を越えて廊下へと足を踏み出すと中腹と奥に二つの扉があり、奥の扉の向こうからは、荒く不規則な息遣い、錆びた鉄のにおい、そして意も言われぬ熱気のようなものが零れ出ていた。それは扉の前に立つと、むせ返りそうになるほどの密度だった。

警戒したウィルが扉を開くと、血の臭気と熱気で狭隘になった部屋で血に染み、激しく動悸するエレナが立ちすくんでいた。その手には、いまだ滴り落ちる血が止まらぬ斧が握られ、床に向けて重さに負けてその頭をたれていた。そしてエレナの視線の先には、血溜まりに浮かぶ全く無傷のオーレルの胴体と、頭骨を砕かれた上に脳髓や眼球までが混ざり合う程に原形を留めない頭部が横たわっていた。「どっつして」

ウィルの気持ちは心の中で反芻され、掠れた問いになって口からでる。

「私が産まれてから、老いることもなかったのよ。こうでもしないと死んだかなんてわからないでしょう。」

エレナは、ウィルの存在には気づかないといった風で振り向きもせず、自問自答するようにつぶやいた。

「こんな惨い殺し方をしたかということじゃない、殺した理由を聞いている。」

ウィルは、優しく笑いあっていた二人を思い出しながら、二重人格のようにまるで変わってしまったようなエレナを睨み付けて、声を荒げた。

「ああ、そうね。」

気の無い返事と共に無感動な表情で振り返ると言葉を続けた。

「私の行動の正当性を証明するには、私の生い立ちと彼の事をより深く知り、理解してもらおう事が必要よね。」

そう告げると、廊下へと出て行った。ウィルも何とも言わず、真相だけを求めてついていく。そして廊下の中腹にある扉を開くと地下へと延びる階段を一人と一匹が降っていく。階段の終わりには丸窓のついた重厚な鉄の扉がたたずみ、小さな円で切り取られた向こうには、シャワールームほどの小ささの白を基調にした部屋を挟んでまた扉が有った。エレナは一つ一つ扉を開くとウィルを先に部屋の中へと誘って、自身は扉を閉めて後より付いてきた。

制御コンピュータのブルーと培養液のグリーンの光彩が暗い室内を照らし出していた。こんな設備がこの家に必要だったことも驚きではあったが、培養液に満たされた円柱の中でパイプに繋がれて漂っていた物の方が驚愕だった。それは、隣に並ぶエレナと瓜二つの顔の女性だった。ただ彼女の顔はエレナに比べれば老齡であり、どちらかと言えば、オーレルに近い年齢格好だった。

「彼女は一体、誰なんです？」

「彼女は、私自身であり、私の母、そしてオーレ・オルンシュタイン博士の欠損した心の形そのもの。私は彼女を基にした、純正クロインの二十三人目なの。」

確かにクロインだという話は、隣で語る女性と目の前の培養液に浮かぶ女性を見比べれば真実味も増した。

「それが、どうして彼を殺すことに？」

「もはや諦観したかのように静かにエレナに尋ねた。」

「オリジナルのエレナ・オルンシュタインはオーレルの妻だった。仲睦まじい二人だったけど、エレナは事故に巻き込まれて死んでしまったの。オーレルは終日悲嘆にくれたわ。でも、いつしか自分で新しくエレナを作り上げればいいと思いつ出したのよ。そして、誰にも知られない辺境でクロニングの実験を始めて、姿かたちを模した女性を容易に産み出した。」

「それなら、話は一人産み出せば済むはずです。」

「そうね、でも、最初の一人目はエレナでなかった。」

ウィルには理解が及ばなかった。人間のクローニングは社会構成上おきる不具合ゆえに廃れてしまった技術であったが、理論的には確立したものだとして知っていたから。エレナは首を傾げるウィルに説明を続ける。

「確かにその人物の技術や知識の再現は簡単だったけど、人の精神はそれだけで出来てはいない。経験やそれを基にした思い出が重要なファクターとなっている。でも、それは容易にロードしたり、代替可能なものじゃ決してない。そうして産まれたのは、エレナの外界を持ち、エレナの口調で喋る別人だった。だからオーレルは、出来損ないを廃棄し、今度は暗示や洗脳を取り入れて新しいクローンを使ってエレナの精神の再現に取り組んだ。廃棄と創生の循環の中で生まれたのが私だった。」

「なら、彼を殺したのは運命からの開放、自己の確立だったのですか？」

「それは、浅はかな考え方。押し付けられた感情だろうと彼への愛情は私の精神と不可分のものよ。」

愛おしむような憂いに満ちた目で冷たい鉄の床を見つめながら言った。

「それが、どうして？」

「今日、あなたとの会話に興じる姿を見てわかったの。彼の精神は私との生活に疲れ果て、耐えられなくなってきた。磨耗し死を迎えようようとしていた。」

「でも、あんなに楽しげに」

エレナは、反証しようとしたウィルの言葉を遮って続ける。

「だから問題なのよ。ここ四、五年であんな顔は見せなかったのに、あなたとの会話には興味を示した。それは、彼が1つの事に妄執する気力を失ったことと、わたしが、いえ、エレナ・オルンシュタインが彼の老いた精神を惹きつけておく程の魅力を失ったことに他な

らない。だから、彼の精神も強靱に新生させる必要があった。」  
「それが、彼の、ひいてはあなたの愛であり、幸せたり得るのですか？」  
「ええ、今度は、私の理想に基づいて、彼を再生させてあげるの。だって、私は彼との永遠の愛を望んで産み出された存在だから。」  
そういつて、ウィルに対して笑って見せると、培養液の中で保存するものの取替えに移った。

次の朝、朝露に白毛を濡らしながら、旅立つウィルの背を見送ったエレナは、新生児を抱えていた。

END

(後書き)

どうでしたでしょうか？  
批評とか、できたら送ってやってください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6048e/>

---

狂乱する科学

2010年10月29日13時16分発行